

「既存建築物の耐震診断・耐震補強設計マニュアル 2018年版」正誤表

平成31年2月15日に発行しました「既存建築物の耐震診断・耐震補強設計マニュアル 2018年版」に下記の正誤がありまし
たので掲載します。

(アンダーラインが修正箇所)

2025.12.15 訂正

下 巻	頁	位置	誤
	p. 333	上 L2	1) 第2種構造要素の検討は、各階各方向について行う。表 <u>19</u> に第2種構造要素が… 正
			1) 第2種構造要素の検討は、各階各方向について行う。表 <u>15</u> に第2種構造要素が…

2025.5.26 訂正

上 巻	頁	位置	追記
	p. 97	上 L2	…(2.6-1)式より求める。 <u>(2.6-1)の上2式がいざれも成り立つ場合には、大きい方の値をOBDとすることが出来る。</u> その時…
頁	位置		誤
	p. 153	下 L9	$Q_i = \left(\sum_{j=1}^n \beta_j \cdot u_j \cdot W_j \right) \cdot S_a = W \cdot \beta \cdot \left\{ \frac{1}{2}n(n+1) - \frac{1}{2}i(\underline{n}-1) \right\} \cdot S_a$ 正
			$Q_i = \left(\sum_{j=1}^n \beta_j \cdot u_j \cdot W_j \right) \cdot S_a = W \cdot \beta \cdot \left\{ \frac{1}{2}n(n+1) - \frac{1}{2}i(\underline{i}-1) \right\} \cdot S_a$
頁	位置		誤
	p. 203	上 L7	iii. そで壁付き柱のせん断強度 Q_{su1} および Q_{su2} は、シアスパン比 $(M/(Q \cdot d_e))$ の下限値を下記の ように設定し (解3.2-3) 式により算定してよい。 $Q_{su1}(Q_{su2}) = \frac{0.053p_{te}^{0.23}(\sigma_{BD} + 18)}{M/(Q \cdot d_e) + 0.12} + 0.85 \sqrt{p_{we} \cdot \sigma_{wy}} + 0.1\sigma_{0e} \quad \text{解(3.2-3)}$ ここで、 <u>p_{te}, σ_{BD}, p_{we}, σ_{0e}, b_e, j_e : 解(3.2-3)式で Q_{su1} を算出する場合は建防協RC基準の (付3.8)式の記号の定義により、また、同じく解(3.2-3)式で Q_{su2} を算 出する場合の各記号の定義は第9章別表9.4の解説付表2 に記され た記号の定義による。</u> <u>$(M/(Q \cdot d_e))$: そで壁付き柱のシアスパン比で Q_{su1} 算定に際しては0.6未満のとき は0.6、2.0を超えるときは2.0とし、Q_{su2} 算定に際しては0.6未満の ときは0.6、3.0を超えるときは3.0とする。</u> <u>d_e : そで壁付き柱の有効せい(mm)</u> 正
			iii. そで壁付き柱のせん断強度 Q_{su1} 、 Q_{su2} および Q_{su3} は、建防協RC基準(付3.7)式～(付3.13)式 による。第9章p.299～300および別表9.7に関係式をまとめたので、参照すると良い。